

日ノ岡堤谷須恵器窯跡の発掘調査 —見学会資料—

1995年9月9日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

- ・調査地点…京都市山科区御陵黒岩 他
- ・調査期間…1995年7月17日～継続中
- ・調査面積…約110㎡
- ・調査主体…財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

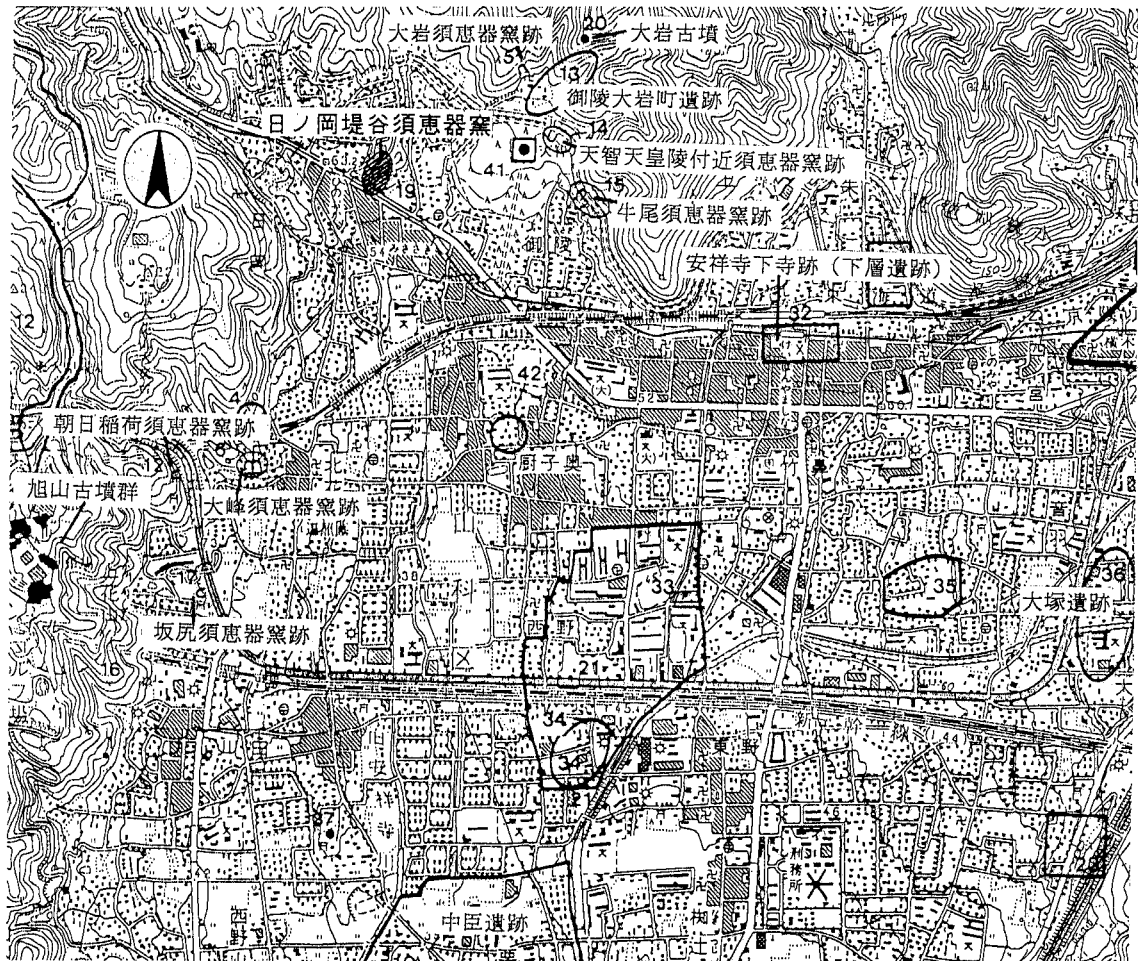


図1. 日ノ岡堤谷須恵器窯跡の位置と周辺の遺跡 (s = 1/25,000)

この遺跡は、日ノ岡堤谷須恵器窯跡と言います。7世紀前半から中頃（飛鳥時代）の須恵器を焼いた窯の跡です。

わが国の古代の土器は、縄文土器・弥生土器の流れをくむ土師器と、5世紀に朝鮮半島から技術が伝えられた須恵器の2種類があります。両方とも釉薬をほどこさない素焼きの焼き物です。土師器は、600～700℃の低い温度で焼く赤焼き・軟質の焼き物です。いっぽう須恵器は、1000℃以上の高温で焼く青灰色～灰色の硬質の焼き物です。焼成温度を高めるために、丘陵の斜面にあな窯と呼ばれる細長いトンネル状の窯を築いて、そこで焼くことが須恵器生産の最も大きな特徴です。このような須恵器窯の跡は、全国各地で見つっています。日ノ岡堤谷窯跡もそうした遺跡のひとつです。

日ノ岡堤谷窯跡がある山科盆地の北部は、古墳時代から飛鳥時代にかけての須恵器窯が集中する地域として、古くから知られていました。日ノ岡堤谷窯跡の他に、坂尻窯跡、朝日稲荷窯跡、大峰窯跡、大岩窯跡、天智天皇陵付近窯跡、牛尾窯跡がこれまでに知られており、山科窯跡群と総称されています。しかし宅地開発等で多くが消滅し、ほとんど現存しません。本格的な発掘調査が実施されたのは今回が初めてです。

遺跡の概要

道路面から高さ15m、傾斜およそ20°の丘陵の頂部近くで、窯跡一基を検出しました。窯跡は、須恵器を焼いた窯と焼いた時に出る灰や失敗品を捨てる灰原から成ります。また窯は、一連のトンネル状のあな形を呈する簡単な構造ですが、製品を焼く焼成部、薪を焚く燃焼部、煙突の役割を果たす煙りだしの各部に分けることができます。窯の前には作業場である前庭部があります。この調査では、上の各部をすべて検出しています。

天井は燃焼部から焼成部の前半分までは崩落していますが、そこから煙りだしにかけてはトンネル状に良好に残っています。焼成部の壁面や床は高温を受け固く焼け締まり、須恵器と同じ青灰色に変色しています。須恵器や窯壁がこのように変色するのは、焼成の最終段階で、窯内を密閉し酸素の供給を断つことによって可能になるものと思われませんが、当時の具体的な焼成技法は、まだ明らかになっていません。焼成部の手前

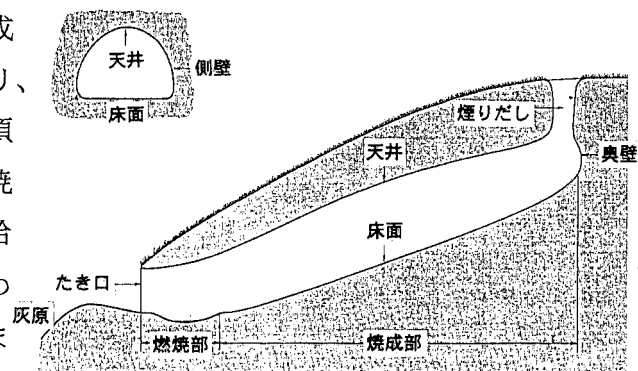


図2. 須恵器窯の構造

の燃焼部では、土が焼けて真っ赤に変色しています。焼成部の床面には須恵器は残っておらず、流入土のみが詰まっていた。

燃焼部から煙りだしの全長は6.7mあります。焼成部は長さ4.5m、幅1.3m、床から天井までの高さ0.6mあり、両壁はほぼ平行しますが、奥壁の方に行くに従い狭くなります。床面はゆるやかな傾斜で、奥壁に向かって上がっていきます。焼成部の手前側で、両側壁はわずかに狭まり、燃焼部に移ります。燃焼部は傾斜がほとんどありません。燃焼部から手前に向かって一段高くなった平坦面が前庭部です。長さ2.0m、幅2.5m程の空間が開け、十分な作業スペースが確保されています。

窯の構築法も徐々に明らかになりつつあります。①まず斜面に深い溝を掘って窯の底を造り、②粘土で天井を架構するとともに側壁・床面を貼り、③一度火を入れ天井を固く焼き締め、④天井の上に土を詰め埋め戻す、といった手順で構築されたと現時点では考えています。ただし、奥壁付近についてはトンネル状に掘り抜いた可能性もあり、今後の調査の進展により、明らかになると考えています。また、壁が壊れた所に粘土を詰めて補修した跡が見られます。複数回の須恵器焼成が行なわれた証拠と言えるでしょう。

灰原は、前庭部を基点に谷方向に向かって黒色の灰層が扇形に広がっています。長さ9m、最大幅約10m、灰の厚さは厚いところで30cm程度あります。この中から多くの須恵器の破片が出土しています。

出土遺物の概要

須恵器が多量に出土しています。ほとんどが灰原から出土しました。これらはすべて、焼成や窯出しの途中で歪んでしまったり破損してしまったものが、製品として流通することなく捨てられたものです。なかには、土師器のように赤焼けで軟質の焼成不良品も含まれています。

須恵器は用途によって様々な形態があり、多種多様です。杯・蓋・高杯・盤・スリ鉢・甗・甗・装飾付器台・脚付長頸壺・短頸壺・甕・平瓶・提瓶などの器形が出土しています。このうち、高杯・甗・器台・提瓶などは、古墳の副葬品に特有な器形で葬祭用と考えられます。他は日常的な雑器で、特別な奢侈品ではありません。最も多く出土しているのが、当時の一般的な食器である杯です。杯はフタ受けを有する古墳時代以来の伝統的な形態のもの、単純な椀形をした後の時代に盛行する新たな形態の2種類があります。古墳時代型の杯は、口径が小さく仕上げの作業を省略する粗雑なもので、この時期を最後にほとん

んど姿を消します。杯に脚を付けた形態の高杯も杯と同じような2種類があります。壺・甕・平瓶・提瓶は、ともに液体を入れる器です。甕や壺は水や酒などの貯蔵用、平瓶は液体を注ぐのに適した形をしています。提瓶は水筒のように提げて身につける器です。スリ鉢は、現在のもとは異なり、かなり小型です。どのような目的で使用されたか不明です。甑は、土師器の煮炊き用の甕とセットで使用されるもので、米などを蒸すのに使用します。須恵器のなかでは珍しい煮沸用の器形です。

さまざまな器形の組合せは、当時の人々の暮らしぶりを知る手がかりになります。暮らしぶりが増えると、それに伴って器形の組合せも変わっていくのです。葬祭用の器はこの時期を最後に姿を消し、以後須恵器の器形は食器類が中心になっていきます。

これからの研究課題

この窯の製品がどの程度の範囲に流通していたかを、明らかにしていかなければなりません。具体的には、この窯の製品の形態・製作手法・胎土や焼け具合の特徴をしっかりと把握し、これまでに他の集落遺跡や古墳から出土した須恵器と比較して、同様の特徴を示すものを探していく必要があります。近くにあるこの時期の遺跡としては安祥寺下寺（下層）遺跡や中臣遺跡などの集落跡、醍醐古墳群や旭山古墳群などの古墳群があります。まずこれらの遺跡から出土した須恵器と比較検討していかなければならないでしょう。それと同時に、近くの窯跡群の製品との比較も怠れません。京都盆地には岩倉窯跡群、大津の瀬田には山ノ神窯跡、宇治には隼上窯跡などがあり、これらとの比較も重要です。

また、窯跡は、最低2～3基が群をなしているのが一般的ですから、今回の調査区と近接した場所に窯跡がないか、これから確かめていく予定です。

以上のような調査研究を進めていくと、生産の規模や須恵器を作っていた人たちの組織のあり方を知る手がかりを得ることができます。須恵器が商品のように比較的自由に流通していたのか、支配者層の手に委ねられ分配されていたのかという問題や、須恵器作りが副業的なものだったのか、専従的なものだったのかなどという問題は、まだ明確な答えが出されていません。このような問題は、古代の手工業生産全体のあり方を知るうえでも大変重要です。この発掘調査を通じて、明らかにしていけたらと考えています。

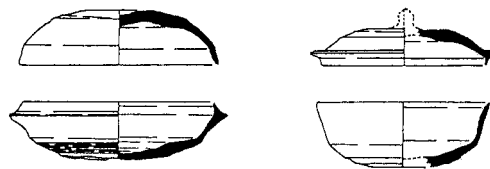


図3. 出土した須恵器杯実測図 (s = 1/4)

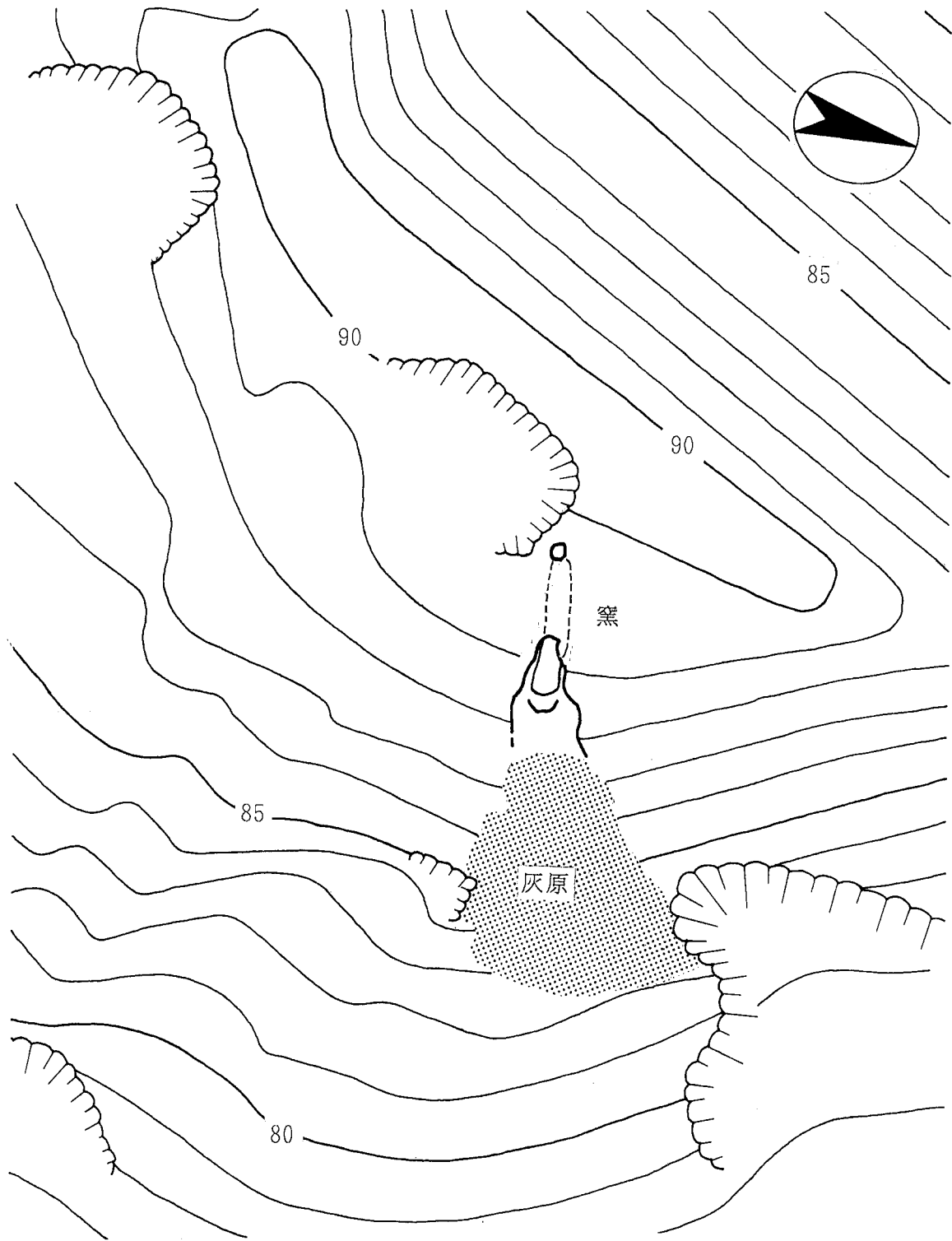


図4. 窯跡と灰原の拡がり (S=1/250)

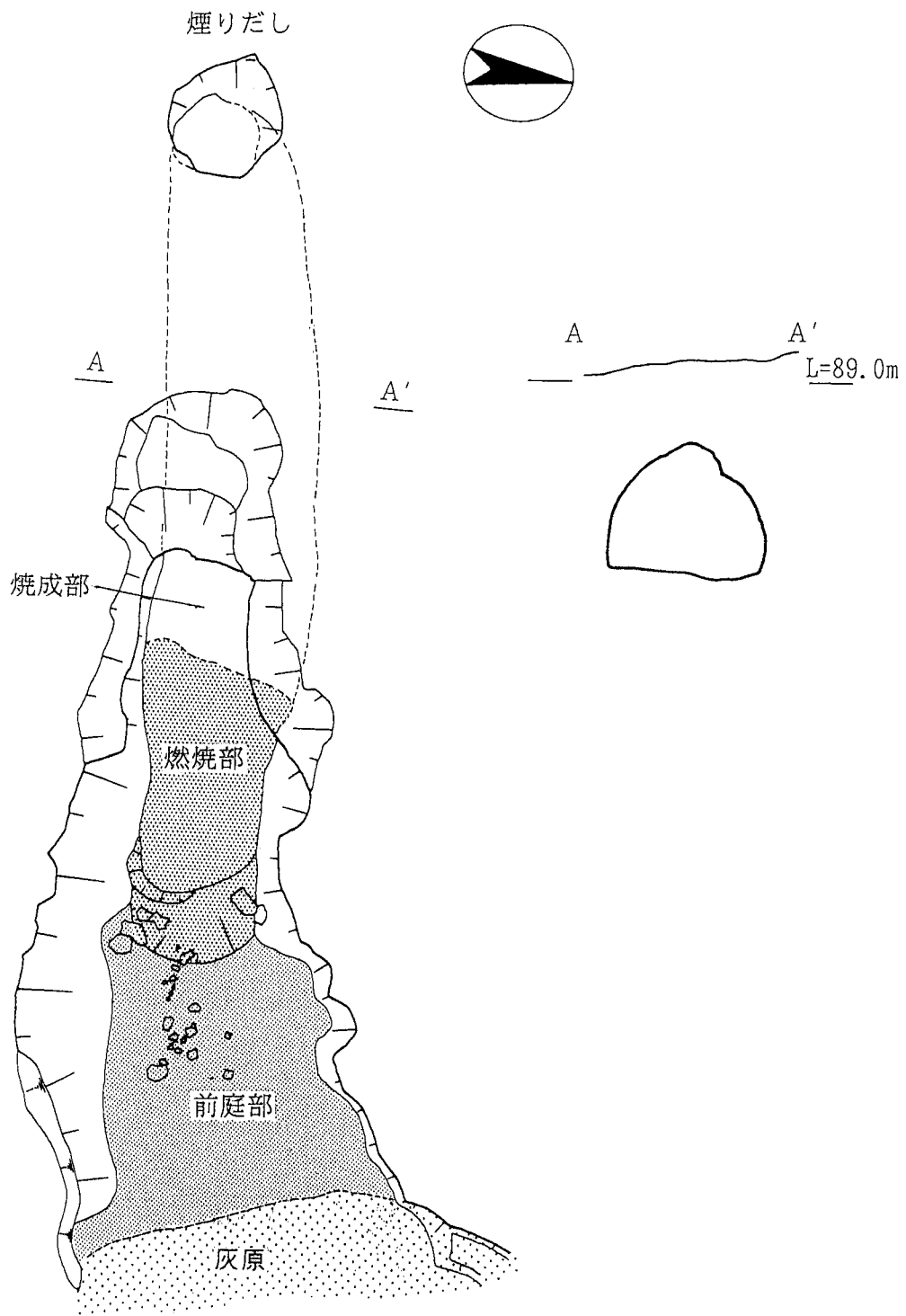


図5. 窯跡平面図・断面図 (S=1/50)